

ひとまち

匠が目指すもの

葉を大きく広げ、太陽の光をたくさん浴びながら、ぐんぐん伸びるサトイモ。秋の収穫に向け、今一番成長する時期を迎えています。藤間で農業を営む田中正宏さん(51歳)は、昨年「農業技術の匠」に選ばれました。田中さんの技で、サトイモの収穫量は増加。品質も向上し、川越産サトイモの商品力アップに大きく貢献しました。

農

業技術の匠とは、優れた農業技術を自ら開発・改良し、生産性を向上させるなど地域の農業活性化に貢献した農業者のことです。農林水産省は、平成20年度からの三年間で四十九人の匠を選定しました。田中さんは、平成22年度に全国

から選ばれた七人の匠の一人です。

選定の理由は、サトイモの収穫量を増やしたことで、その栽培技術を発表し普及に努めたことです。

収

穫量を増やすため、品種選び、種芋を植える間隔、土づくり、たい肥、水やり、輪作サイクルなど

今年は比較のため、子芋(右側)と孫芋(左側)を栽培。成長の早さは一目瞭然。

あらゆる点で工夫しました。その結果、これまでの一・五倍も収穫できるようになりまし

た。栽培する品種は、最も収穫量

が上がると思われる「土垂」という種類。名前は、長く伸びた葉が地面に届く

ほど垂れ下がること由来するとか。食感がねっとりしていて、関東で多く栽培されている品種です。

種芋を植える間隔にも気を配りました。通常は、株の間隔はおおよそ五十五cm、畝の間隔百二十cmのところ、それぞれ四十五cm、百cmと密集させて植えます。また孫芋を使うことが多い種芋は、あえて一回り大きい子頭(子芋)を使います。

この種芋の選択は、夏に大きく成長するサトイモの性質を良く知る田中さんが工夫した点のひとつです。それは、大きく成長させるために大切な夏の水やりと関係があります。この時期、水をまいても暑さですぐに蒸発してしまいます。そこで、成長の早い子頭、しかも葉が大きく広がる土垂を使うことで、土からの水の蒸発を防ぎ、サトイモに水が十分行き渡るようにしました。「二十年間、この方法で栽培しています。うまく育たないのでは、と心配されることもありましたが、味も形も良いものが育っています」。

土づくりでは、野菜の成長に不可欠な窒素・リン酸・カリのほか、土の中の目に見えない養分にも気を使います。何年もかけて独自の「畑の味」を作るのは「それぞれの家庭が工夫をして味を良くしていく、ぬか



選定の知らせを聞いたとき「うれさと協力してくれた皆さんへの感謝の気持ちでいっぱいでした」

農

業者の研修会などで、平成7年からこうした技術を公表。栽培技術は近隣自治体へも広がり、この技術を取り入れた農家では、収穫量が伸び、所得向上にも貢献しました。田中さんは、県の地域指導農家として、若い農業者や新たに農業を始める人の育成に力を入れていま

す。現在、田中さんの畑では、会社を中途退職し、農業を志す一人の「弟子」が、直接指導を受けながら、自立を目指しています。

川越産サトイモの商品力底上げに貢献し、増収方法を確立したところは、まさに平成の赤沢仁兵衛(*)のようです。選定されたことに対しては、周りで支えてくれた皆さんのおかげと話す平成の匠。

「田中さんの畑で取れた野菜を食べると元気になれる、と言われるくらい体に良い野菜を作りたい。野菜で健康づくりのお手伝いができたらうれしいです」と話してくれました。

*赤沢仁兵衛…天保8年(1837)～大正9年(1920)。今福村(現在の今福)生まれ。赤沢式と呼ばれるサツマイモの増収方法を確立。どこへでも出掛け、その方法を惜しげもなく教えた。

緑と花あふれるまちに



7月9日、「緑と花まつり in かほく運動公園」が行われました。川合市長、三上市議会議長、地元の小学生により、市の木であるカシを記念植樹。地域の協力で、マリーゴールドなども植えられました。乗馬体験やクイズ大会を楽しむ子どもたちの楽しそうな声が、公園にあふれていました。

手作り浴衣を披露

6月30日、川越工業高校デザイン科の3年生9人が制作した浴衣4着が、お披露目されました。2、3人が一組になり、染色から縫製までを2か月間かけて手作り。「絵柄が合うように染めるのが大変でした」と荒川和稀さん。色の数や柄の細かさで染める回数が増えるため、中には100回以上染色した作品もあるそうです。百万灯夏まつりでは、打ち水に浴衣を着て参加、涼を誘いました。



ひとまち ふおとニュース



行って 会って 体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸あるき

ひとまち



「見える化」のシステムを説明する谷島さん

ことに成功しました。その結果、利用者がいない路線の見直しを行い、効率的な運行がで

鉄道やバスなどの地域公共交通の維持や活性化を推進するため、国土交通省関東運輸局が創設した地域公共交通マイスター制度。毎年二千kmを超えるバス路線が廃止されている中、地域の大切な移動手段としてのバス路線を維持する取り組みが評価され、十三人の初代マイスターの一人にイーグルバス(株)社長・谷島賢さん(57歳)が任命されました。取り組みの内容は、運行の「見える化」と「最適化」。一度車庫を出たら把握することが困難だったバスの運行状況は、位置情報を伝えるGPSの取り付けや、センサーでの乗客の乗り降りの把握により、数値として見えるように改善されました。「見える化」されたデータは、パソコンを活用して徹底的に分析。これにより、「最適化」した運行計画を作る

初代「地域公共交通マイスター」誕生

きたほか、鉄道ダイヤに合わせたバスの運行や停留所を回る順番を変更するなどして、利用者から高い評価を得ました。こうした経験から、平成18年には、近隣の路線バス事業を引き継ぎ、経営の立て直しに成功しました。これからの交通政策は、まちづくりの一環として取り組む必要があると話す谷島さん。観光を生かした川越のまちづくりには、郊外に新たな観光スポット開発をすることなどで、面的な広がりを持たせて、経済効果を全体に波及させるのではないかと考えているそうです。今後は、「これまでの経験や知識を生かし、観光客にとって、より便利なバスのネットワークを作るなどして、観光によるまちづくりのお手伝いができればうれしい」と話してくれました。



市内巡回バスの運行経験がマイスター誕生のきっかけ